

東京湾岸・「香取海」沿岸の 前方後円墳

5～7世紀の東国統治の一事例

Keyhole-Shaped Mounds on the Katorinoumi Coast of Tokyo Bay :
An Example of Rule Over Togoku (Eastern District) in the 5th to 7th Centuries

広瀬和雄

HIROSE Kazuo

はじめに

- ①東京湾岸と「香取海」沿岸の中期前方後円墳
- ②東京湾岸と「香取海」沿岸の後期前方後円墳
- ③複数系譜型古墳群と政治動向
- ④東京湾岸・「香取海」沿岸前方後円墳の歴史的意義

おわりに

[論文要旨]

5世紀の東京湾岸と「香取海」沿岸には、海浜型の大規模前方後円墳が7基、築造された。それらのほとんどは1代、もしくは2代しか続かなくて、安定した首長墓系譜は形成されない。いっぽう、おなじ頃の上総・下総地域や常陸南部地域では、前方後円墳はほとんどつくられていない。そうした事象は6世紀にも見られる。東京湾岸の内裏塚古墳群、「香取海」沿岸の玉里古墳群などの複数系譜型古墳群では、有力首長を中核にした首長層が、数人の中間層を率いて、多数の前方後円墳と円墳でイデオロギー的一体性を見せつけた。

このように、二つの内海の沿岸では、水運・舟運とつよいかかわりを見せる有力首長層が、二つの時期にわたって前方後円墳を造営した。ここで注意をひくのは、それらはスムーズに連続しない事実で、いったん途絶した首長墓の系譜が、時間を隔てて復活したかのような様相をしめすことである。そうした中・後期における、前方後円墳の偏在性と不連続の連続性、さらにはいわゆる交通の要衝への立地は、畿内中核も含めた各地の首長墓系譜に通底している。したがって、在地首長の自律性だけでは整合的な説明が難しい。

中央-地方の秩序にもとづく政治的墳墓が前方後円墳だから、そこには中央政権と地方首長の二重の意志が貫かれている。東京湾と「香取海」へのつよ指向性をもった、中期の大規模前方後円墳と後期の複数系譜型古墳群は、中央政権の統治方式を表わしていたのである。5世紀初めごろから5世紀後半ごろの第1次統治は大首長を、5世紀末ごろから7世紀初めごろの第2次統治は小首長を、それぞれ対象に実施された。また、第2次のそれは6世紀後半ごろの、東国における前方後円墳の急増をもたらすものであった。

第1次の東国政策は高句麗、第2次のそれは新羅と、ともに対朝鮮政策の兵站基地的役割を、東国首長層に求めるものだった。それらは「もの」と人の首長ネットワークの根幹をなす水運・舟運を掌握していた有力首長層を、統治することで実現したのである。

【キーワード】複数系譜型古墳群、海浜型前方後円墳、前方後円墳の偏在性と不連続の連続性、二つの統治方式、中央と地方